

第8回 東南アジア分科会 議事録

日時: 2008年3月5日 (水) 13:30 - 15:00

場所: 文化庁 東館 17F1 会議室

出席者(敬称略): 上野邦一、桃木至朗、中川武、片桐正夫(以上、分科会委員)、井上和人(奈良文化財研究所)、関泉、守山弘子、橋本奈津子(外務省)、清水真一、二神葉子(以上、東京文化財研究所)、青木繁夫、豊島久乃、田代亜紀子、谷口仁(以上、文化遺産国際協力コンソーシアム)

1. タンロン遺跡保存に関する報告

歴史班調査: ベトナム側は17世紀から以降(黎朝後期)のことはよく調べている。しかしタンロンは李朝や陳朝などの遺構が多い。遺構についても黎朝後期の視点から考察していることが多い。そこを課題とする反面、黎朝以前のものにつき、日本側歴史班から貢献することは多いと思う。

測量研修および考古支援: 草の根無償によって供与された機材についての研修を実施。タンロン関係者(コアセンター、考古学院)今回はA地区・B地区の解析を実施しつつ測量研修と考古研修をおこなった。2007年1月の測量研修からベトナム側は3メートルグリッドの遺構図の作成を行い完成していた。今回の研修はこれら遺構図を使用しながら行われた。考古解析研修実施にあたり、A地区・B地区の再精査をおこなったが、様々なことがわかった。造営尺度について。六角礎石楼について。A地区とB地区から発掘されている建物と建物、建物と通路について解明。発掘作業員 100 人弱。遺物整理人員。ABD地区についての分析をすすめる必要がある。他にも発掘トレンチがあいているが、取り急ぎはこの3区を優先するべきであると考ええる。

気象観測装置設置と研修: 文化無償による気象観測装置・保存修復装置の設置をおこなった。設置と機材使用方法について研修をした。気象観測については、遺構保存の対策をきめる上で重要な気象データを得ることが目的である。設置場所はA地区・B地区の北である。研修参加者は8名(内5名は地質研究所の職員)。設置・使用方法・データ収集・解析について講習をしてきた。しかし、解析方法については後にあらためて追加講習をする必要がある。また、保存修復装置の使用についても研修をおこない、主に蒸留水、工作用ブラインダーのメンテナンスと使用方法を講義した。保存に関しては6名の研修生が受講し、考古学院3名、コアセンター3名であった。

・尺度については難しく、今後これが定着していく場合が多い。200 尺というのは興味深い。
大きい尺はどうか。

→20尺があるが、大きいものはない。

2. プランバナン遺跡復興支援修理計画報告

清水真一(東京文化財研究所)

報告:この3月をもって、プランバナン遺跡復興支援のとりあえずのめどをつけるということで、修理計画の提案をした。これまでに3回に分けて調査をおこない、ユネスコを交えた国際会議も3回開催され、そこでの報告もしている。修理計画は、総括を筑波大学大和智教授に、過去の修理に関する歴史調査はサイバー大学小野邦彦教授、構造調査については三重大学花里教授、復旧の為の修理計画については文化財建造物保存技術協会を中心にまとめていただいた。別冊として日本占領期に書かれた修理報告も日本語訳をつけて印刷している。また、オランダ植民地期の写真が2万点あり、そのうち1万点はガラス刊版も残っていることが調査でわかっているので、そういった資料も載せている。それから図面関係の資料が五百数十枚あるが、ばらばらに保管されていたため、建物ごとにまとめて今後の修復に役に立つようにした。ラジコンヘリを飛ばして撮影した写真は、幾何学的にゆがみを補正して立面写真を各面そろえて、これをベースに破損調査等の記録、修理の提案等の書き込みをしている。そのほかにも、地盤調査、コンクリート強度、真鍮の強度などを行い、それらの調査成果に基づいて、最終的にステンレスを使った補強方法の提案をおこなっている。加えて、各祠堂とも門構えが破損しているため、そういったところについては部分的な解体方法の提案をおこなった。3月中に最後の派遣をし、最終報告書をインドネシア側に渡すとともに、その内容について現地でプレゼンテーションをし、質疑をする機会を設けている。

・部分解体をするというのは現実的に可能なのか。

→ただこの部分を解体すればいい、ということではなくて、この石をこうやって次にこうすればというようなことも検討したうえでの提案をおこなっている。

・部分的の方が難しい感じがするが。

→そこも当然石膏も含めて検討している。

・修理計画に基づいて、実際に修理をされる方は現地の方になるわけなのか。

→ 現地は修復に自信をもっている。ポロブドゥールの修復があり、かなり人材も育っている。ただ、お金が無くて機材が無いというような制約はあるが、経験に基づく自信はあるので修復

は実施されると思う。

・日本の専門家から見てもできるという判断をされたのか。

→頂部の解体は自らの主体的な判断で既にはじめている。基本的にはインドネシア側として解体はしたくないという前提がある。門など一部解体した方がいいだろうというのは、積極的な日本側の提案。どこまで採用するかは向こうに任せている。

・オランダ時代の修復は結果的に今のところ有効であったということか。

→ポルトランドセメントについてはよくないが、石灰セメントはいいのではないか。

3. ラオス 協力相手国調査報告

田代亜紀子（文化遺産国際協力コンソーシアム）

報告:コンソーシアム業務の中で、国内の連携だけではなく、国外で実際に文化遺産国際協力が行われている現場で何が必要とされており、どのような協力が今までされていて、それがどのように働いているのかということや、日本だけではなく各国がどのような活動をしているのかという現況を把握するために相手国調査というものが設けられている。本年はラオスに対する協力相手国調査を行ったので報告する。

調査では、文化情報省、ユネスコ国内委員会、世界遺産管理を担当している教育省、世界遺産ワット・プーの担当チャンパサック県文化情報省局長、ワット・プー事務所所長などと面談し、情報を収集した。また、ワット・プー遺跡管理事務所に行った際、偶然フランス政府のワット・プー事業の代表者がおり、彼からも詳しい話を聞くことができた。

ラオスの文化遺産は、木造煉瓦建造物や石造建造物、考古学的な遺跡や町並みなど、多様である。文化情報省によると、現在ラオスには15の国家遺産があり、この登録を見直している最中で、20増やして35にする予定があるということである。また、文化情報省考古学局は、国家遺産局に名前を変えるとされている。そういう面でも、いろいろな文化政策の見直しが現在行われているところである。世界遺産については2か所あり、北部のルアンプラバンと南部のワット・プー遺跡群である。この管轄については、中央政府が担当して、中央政府下に管理事務所を設けてそこが管理をしているということだった。また国立博物館はルアンプラバンとビエンチャンに2つある。県レベルでは12あるが、なかなか運営が難しいようである。

まず、調査はビエンチャンから行った。ビエンチャンには国内最古といわれている寺院があり、本堂の内部は壁画が描かれている。ただ、オリジナルの部分は非常に少なく、フランス植民地期に書かれたものだということである。ほかにも、ワット・プラケオ、タートルアン、シー・ムアンなどの寺院を見学した。

世界遺産ワット・プーは南部に位置し、2001年に世界遺産に登録されている。南部には、その他にもカンボジア国境の近くにコーンの滝、フランス植民地期の機関車や鉄道などが残っている。ワット・プーは、1980年代にフランスが研究をしており、上野邦一先生も1989年から1990年に奈良文化財研究所の発掘調査で入っている。早稲田大学の西村正雄教授も現地で調査を継続しているが、90年代にはイタリアによる研究がなされて、修復がなされている。日本のODAで、ワット・プーの水利施設整備がされているとのことであるが、博物館も日本のODAによるものである。

ワット・プーは登録前にユネスコによってマスタープランがつけられているので、それに沿って整備が進んでいっている状態である。フランスが去年から協力に入っていて、フランスは南北のパビリオン(祠堂)修復を事業の一環としたいといっている。また World Monument Fundも、この南北パビリオンの修復に興味を示しているとのことである。今現在イタリアによって修復が進められているのが、ホン・ナンディーという祠堂である。ホンというのが「部屋」とか「堂」といた意味なので、ナンディー祠堂という風に訳した。今プロジェクトの2年目ということである。中央祠堂は、以前は屋根がなかったと思ったのだが、屋根ができていた。ワット・プーから少し南に行くと、ナンシダーと言われている寺院があり、ここはどこの協力も行われていないが、ラオス政府によって草が刈られたり、整備がされて、イタリアの協力によって遺跡説明の看板のようなものが中に立っていた。ラオス政府としては日本にここぜひやってほしいとのことである。もう少し離れたところに、トモ寺院と呼ばれている寺院がある。ラオス政府が草を刈ったり、フェンスをつくったりというような整備を進めている。ラオスとしてはここも何もしていない状態なので、支援していただきたいとのことである。

北部ルアンプラバンも世界遺産として登録されている。その郊外でメコン川を上流へ登ると、石窟があり、これについてはオーストラリア外務省とキャンベラ大学によって保存プロジェクトが92年から97年に行われている。ルアンプラバンの町中には、建物が散在していて、旧王宮は国立博物館になっている。1909年建立と言われているのだが、スウェーデンによって援助されている。町全体はユネスコとフランス政府によって援助されていて、インフォメーションセンターもつくられて、マッピングをされて、小道が整備されている。

中部のジャール平原については、ラオスの中央政府としては、2010年の世界遺産登録を目指している。ジャール平原にはニュージーランドが3年間で100万ドル出すという話をされていて、その事業内容を不発弾処理と貧困と観光とで、ジャール平原の整備を目指すとのことである。ユネスコ派遣でベルギー人の人類学者が参加して協力している。

今回の調査は、ラオスにおける文化遺産国際協力に関して最近情報がないということで、改めて調べておく必要があるということで行った。過去には、ワット・プーの発掘面で協力を行っていたが、それ以降情報は少なかった。むこうでは北部、中部、南部という拠点があって、それぞれのところの大学等で人材育成ができればという希望があった。一つ感じたのは、博物館を日本のODAでつくったのだが、その中に無秩序に、何の脈絡もなく石像が展示されていたということで、非常に悲惨な状態で、箱は日本でつくったが、展示ケースはどこからか他

所の安物を寄贈してもらったものを使っているということである。訪問する人は、博物館と展示とセットでみるので、せつかくの施設がもったいないと感じた。また、過去に遺跡の排水についても整備したようだが、現実にはフランスやイタリアの修復プロジェクトがどうしても目についてしまい、日本の存在感が薄いと感じる。ルアンプラバンの町並みも非常に魅力的であるが、日本が介入する余地はないという印象だった。ワット・プーそのものは世界遺産だが、むこうとしても日本がやってくれれば良いと思っているトモ寺院やシダ寺院は飾り気も少ない。また、外れた場所にあり、人があまり行かない。トモ寺院は、現在人があまり行かないところだが、寺院はかなり大きな伽藍をもち、少し発掘すると全体が解明できるような感じであったので、考古学的には非常に面白い遺跡である。地表 20～30 センチの深さでトレンチをいれると、次々と伽藍が解明されていくような、効果が現れやすいという印象を受けた。学術的にはおもしろいと思う。

・ワット・プーの保存管理事務所というのが、唯一の発掘されたものが見学できる施設になるのか。

→そうである。

・すると多くの観光客がだいたいそこに訪れるのか。

→そこを通らないと遺跡が見られない位置にある。施設そのものが満杯状態でもう一棟ほしと言っていた。

以上